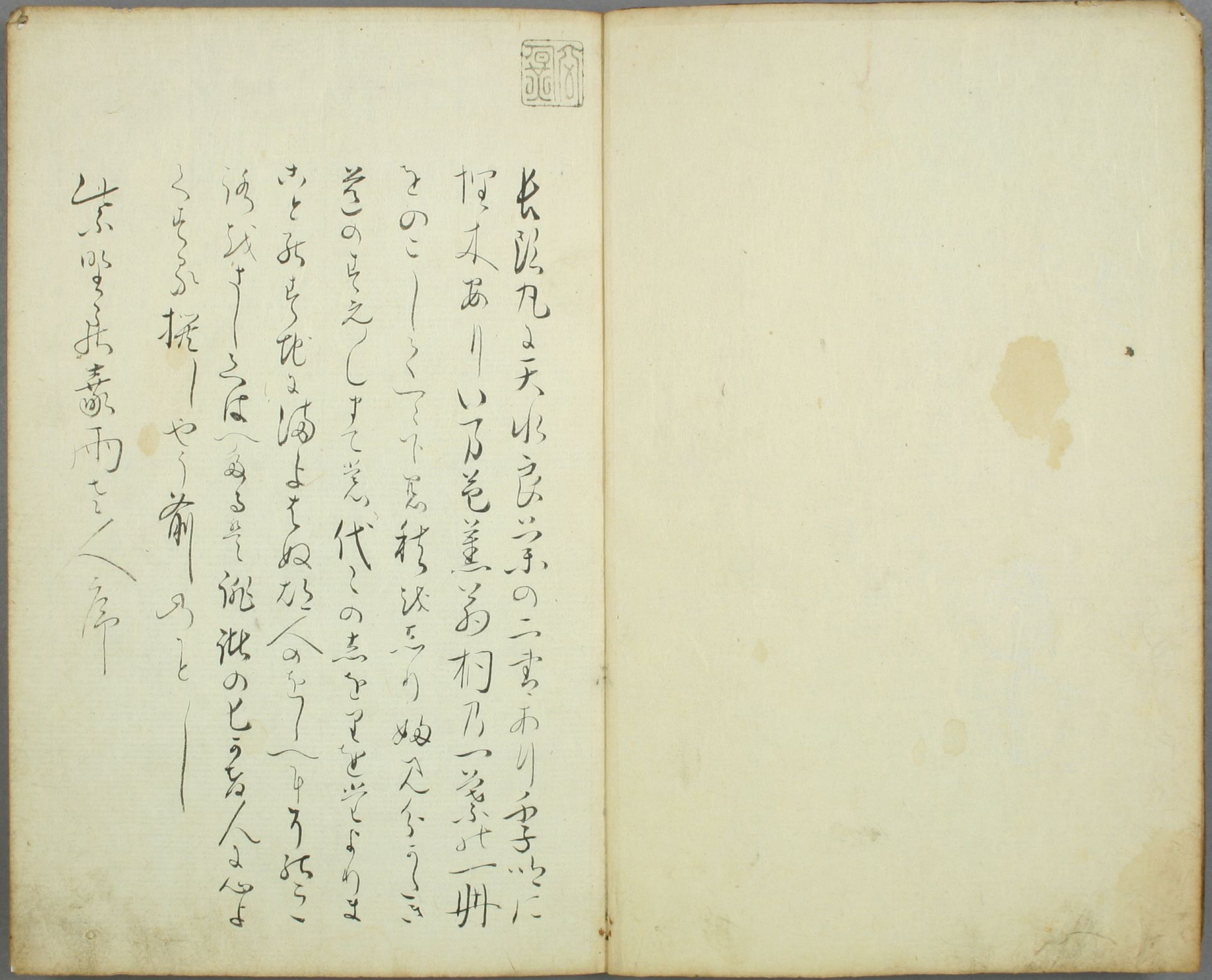
中村俊定文庫
文庫18
211



長歌凡そ天地人の三書あり和字にて
恒末あり いづれも芭蕉翁村乃一葉より一冊
をのこしてとゝめ置れ 移状ちり如入ふうき
芭蕉の長文しまて芭蕉、代この志を主とをとよりま
さと和歌也 海よりぬ於人のをつ一ゝ事ゝ
海歌さしこゝは〳〵あるを 俳諧の七ゝ名人よ心よ
くもふ 撰しやう前のことゝ

紫野雪舟叢雨さと人序

交者ゆゑ[illegible]たゞ柞（葉ふ茶菓貧窮志
のよすがし雪ゆゑ[illegible]ゆく門人の純忠よ
せ殘し少く徒し殘根ゆゑ[illegible]私況懷
を弘く梓ゆゑ世事よ就て繩を習し道
をふきを句法化るゆゑ[illegible]人学ぶ羽
負交りの誠を乃根況ゆゑしてその標況
相しむるゆゑ今純人集て古のごとく
ふくんや春の時庵のゑ人純忠

宮城県図書館

梧一葉巻之上

芭蕉庵桃青著

蓮乃茎

連歌俳諧ともゆゑ附合肌の事ゆゑ秘支あり苦句を
をれをすゝゑ志ゆゑ[illegible]
ある庵しいかゆゑ句ゆゑ[illegible]
前句へふゝろうよりたゝ不和ゆゑ[illegible]
をふゝへゝたまゝいふつゝ[illegible]
下ゝふゝゆゑ句をゆゑ[illegible]

宮城県図書館
中村俊定文庫

なりぬ面しらく乃ぞ
さく花ぬ[illegible]をたゝ[illegible]蓮乃葉を
引折ゑ[illegible]
と[illegible]
[illegible]蓮[illegible]
く[illegible]かよりゝ[illegible]
[illegible]

五尺ぬ菖蒲

一句ぬ[illegible]五尺ぬ[illegible]

[illegible]池水ぬ[illegible]
[illegible]高く口ぬ[illegible]
[illegible]

夜乃桂

なゝ[illegible]所ぬ[illegible]
ぬなり盈東西南北を足くむ[illegible]
桂一本ぬ[illegible]
ぬ[illegible]東西ハ[illegible]
[illegible]

乞食袋

乞食袋とは、[illegible]物[illegible]
[illegible]酒[illegible]毎日[illegible]入れ
[illegible]用ゆ[illegible]道[illegible]同じ
同じ[illegible]所[illegible]世事[illegible]やまと[illegible]
[illegible]用ゆ[illegible]孫[illegible]
ふくろに入れ高[illegible]
人[illegible]用ゆ[illegible]
人[illegible]七宮二月[illegible]中[illegible]

あしらひ[illegible]大小長短[illegible]白目[illegible]皇の[illegible]
やうふ[illegible]連歌誹諧[illegible]寸七十
四[illegible]文字[illegible]
[illegible]甫於葉[illegible]句[illegible]
[illegible]仮[illegible]上古[illegible]事[illegible]
[illegible]本據[illegible]横[illegible]
皇[illegible]

右五件乃たもむ[illegible]連誹の名目宗匠の覚悟[illegible]事也

これより俳諧の制

一 打越乃事

秀句 打越に秀句いひたらハ隣に秀句いふを嫌ふ、
むすひ句いひたらバむすひ句秀句いひたるの句次乃句に
く受るはよし打越あし、

一 字にかゝりかんなはなるゝ事前の事なりにあまりハ当世儒
誹のさまを人に萬葉の文字乃かなは義理よくハあるへからす
かんなつかひ文字かなにたゞ誹を忘るゝ事第一此道のいましめ也

一 誹言も音声にくはしうふ事好みしかたし誹興ハあまりにさとく

はし合の句といふとハ親子兄弟貴人高位のなくてあまりもなる
ものなれハ意のことはすくなや古葉にのむ由なす

一 故事乃事すの事をふくみて句作りするはよし 楊貴妃
昭君劉明孔明なとをいひ出しぬ其ハ名残よし其不残ふ
る次乃句のものも魔となる由し

一 熟して覚えし故事なとゝ出して座よりそれをしけ
ことひるさへし對の句もしそれハ第一亦面倒なるへきなり

一 部類ともふるし返り人にしらくさりぬる世にはいひ出しても
称もあるまし俳しく道手あんきをやてをとりてなとや事

一向首誹の業にはあらず

一花の句を引あるべき花の句最上の尾籠なり

一難句中也一座の気もつゆあく言葉なれば体なりとはいえども

一長短の句ともふいしつめるるいなしくすくし心敬僧都も

連歌は篇序頭曲流を当一にといしたもい前句篇序頭

なりしかい附句曲流をんはなるべ一欲かるくいはは篇冠五文字序肩

七文字題脇五文字曲据七文字流当七文字なり連歌なども前

句篇序頭上は句下乃句を分るるなり附句曲流を

前句曲流は附句篇序頭と心得べ一二を挙てた

とふるなるの古歌を

前句曲流なり（前者なり 下乃句）

附句篇序題なり

又

前句曲流は心也（前者なり 上乃句）

附句篇序題の心也

古歌を曲流しなるものなり篇序頭しるものなり

前句をいひなりしるべいは附句をいひなりたべ一句をい

ひつめるべいは此味ある面一たとへば篇をしめるるなり

（面 前者なり 乃遠くなり社也 当）

（花 花をいふ 山は山ふるなり乃 定）

（遠 遠をいふ 石の名称をいふ）

見曳は山は附猪の数は来る

席中五句出る題ハ文ばやりの曲ハ大くこなりまさる
院ハ成就しまうらは

一前句親句より所ゝ続句と来るハ附句疎句ニ成ル親
句とふハ三てくふまゝ手ゝこゝ続句疎句とは
言葉続元ゝくさゝ也ゝ句なり親ハ縁言な
ゝ続くゝを相ゝ言ゝ続句なり疎句ハ前句を引
はゝしゝ多ゝ出ゝ句なり

一連歌乃ゝ言葉ゝ事ハ飛鳥井雅乃卿製なるハ
くハいかゝ〳〵連俳ゝ出ゝ建保ゝ出ゝ又式

目ハ宝治ゝ出ゝ建治二年かゝくふおゝて藤谷
為相ゝ卿作なるゝ建保ゝ六十三年ゝ新式ハ應
安ゝ三百除年なるゝ今葉彰式追加ハ文亀ゝ道
遠院殿相談牡丹美追加ゝ出ゝ手来ひゝ
俳諧ハ卿連歌の席ゝ五七句十句もつゝあり
犯しゝ之俳諧哥を後歌ゝ連歌ゝ
式目ゝ来ゝ出ゝ俳諧歌ゝ後ゝ
俳諧ゝ連歌ハ以ハ五十句百句と
つゝ出ゝ〳〵ゝ宗鑑貞徳なる連歌乃式ゝ大

筑波師傘立圃ハそもいとふる事起なむし

る誹諧三を挙ク

紅葉ちる夢やさふらふ帰　仙吟

子雉乃ぬ辺り花のあへる　宗長

山ぬ沼ふ白ぬ月出る　宗祇

ぬ紹巴亭ニて連歌懐紙のちはそを菓子出され

ぬむ鳥ぬはしらちすす茂りぬ　玄旨

朽木ぬ本ぬこもるる夏むし　紹巴

燈を点つる板戸ぬ蛍　昌叱

かくぬもそなれハ連歌を本とすれ共やさしく句真ち

くいふもへる事ハ誹諧をしハ連歌を捨ル

誹諧ハ今世盲誹師誹諧ハ不ぬたるハ不便

一面ハ句乃ちち四句めつ句ちく後くちちふ事発句脇

第三ちくいし来りしを四句めちくちとろくう

ちちちくなりちへく八句ぬちち第三四句五句六句七句八句

まて似ぬやうにちる事大秘事なり

一無心所着といふ事一句もちちる句へものす

五七五七ハ数あしちそなりはあまの袖也

こゝいとかゝふなるふるの袖やまひしかくしてふくさ
かくしてゝ忘れぬ記念こゝ四体をゝゝゝゝ前句をゝゝゝ
ゝ他やまひあり

一鎧乃句こゝふ事一句乃うち用ふ事器財道具物の
名をとゝ出し事取合を言ふ事なる句なり秀句也
ひ句も無理ゝいひてゝ鎧乃句をなるなり
ゝゝ後ゝゝ他ゝゝゝ

一冠をゝ袴をゝ皆をゝとゝふ事有冠をゝとゝ上の
五文字中の七文字へ用ゝかゝふ事なり

袴をゝとゝは上の五文字下の五文字中の
七文字用ゝ皆ゝ事ゝ皆をゝとゝ五文字七文字連
續ゝゝふゝゝ下の五文字用ゝ皆ゝ事なり

冠をゝ　ゝゝ乃ゝをゝ袖ゝ恨ゝ事
袴をゝ　我宿ゝ　ゝゝ恋ゝ他ゝ
皆をゝ　友ゝ　人ゝ仲間　舟

右ゝゝ別ゝ他ゝゝ座をゝ事ゝ

一自他乃句差別肝要なり前句を自ゝ我乃ゝ所句
他乃人ゝ句五文字ゝ自ゝ句七五ゝ他乃句なり

「自」今一やう「他」雪中萌を引ふまこと
「他」障子乃らうそくゆきこもり　史
「自」発すふる枝切さくらかくく
紛乃上女子せき寄ぬき敷し
右此句障子の内中ぬ此身へさ秋
乃中ぬ此身へ
句をもて此四句をもくみこころく身へ
表事なり

一同意とゆふ事前句を附句して釋しさらぬ也此句
況思ふらへあ表事なり心ふへし

風も吉せ如書ぬ表ぬ
雨ふる夕山うく長雨ふて
不昭しうる詠なり
かく句をもくうちさくうちふ不ふ詠ふなれとも悉皆
前句をうらうへし唱へうるなる歌也
一有文無文とゆふ事
ちうろ此あ句ゆるとゆふ事を有文体と名つくかくう
ひくえんにのくあきあくもくいくもくいくもくて詠乃に
わひふくおもまうの句なる歌也　句作いしつめ

面白く業平いひ続し一人さとなれいそ男はうり
秋秀逸なり
無文体といあやなる紀とふ事なり句作り花もひよう
ゆるるたもむ武蔵くらたいひ盡しこゝろ有あるてふを
もなく味ふ色よ不もなし一重のたもむきを一札
千の色刈取ゆるなり人せんなし一
一我句を人千きうしめきこゝ也中所おくふ分西を
〳〵身句ハきこゝろと人おもふをのなりたと〳〵を
口論宣業のふとし〳〵君もさ紀もをいりとたもふく

ち千非おほるゝ〳〵
一芭句千付る事前句を紀ふして業を色し前
句乃ゝ業千すゝ句を切くかきた紀千付る変一
句乃精霊者色ゝに第一ゝ紀次の句つきゝ紀起
一連庵のふゝ紀ゝ自句を遺言と思婦〳〵し人妻
遺言千あゝの河紀ゝふゝいゝ紀色人もいひを
句も紀なり庵ゝ〳〵いやゝゝも自句のあゝつゝ妙を
蕉庵の赤面なり色し
一二句ゝゝ紀我句を変悔を〳〵いひゝゝ〳〵きゝとも

木人乃面目のごとく死句千近し活句死句ごとあり
活句ハ字〻脉通し死句ハ前〻氣血かよハす
一脉乃句韻字面なり第世白き黒き淡き濃き類
と韻字と四ツ有る俗誹師ありて乃らうくまを
留同字なり脉をまゝ蒙しうく留歌事五句七句ハいと
捨ハ時乃事なり百韻百仙なと一本ごとに芝蘭ハ
なき事なり近年の盲誹師をこり留しく脉のまゝ
禁留第三ハ韻字面文字面もうくうりなるなる
ふうくいく記事なり脉乃韻字面の證歌連

の初
拾遺集千中将ごく作りける時右大辨源致方朋臣
もとゝ八重ハ紅梅を折くつかうとゝく
流俗ハいらふをあらす梅花　右大將　實資
弥重ゝ求めもとゝ　致方朋臣
ふしぶしうくに日ごとうくに花日せ〻ゝ
ゝふゝゝ今ハ孫ゝく成ゝ　天暦帝
御前ゝ作りしゝ奏しうく
夢千あふ夢ゝ　ひとやゝ川經
　　ゝ中北の
　　内侍

らまし乃きらひ送百といふをなし若句にも発句に
も指合につき五句三句七句かとふくるし宗鑑貞徳
立圃なとより制をかたくあやりしいまも三つとち
なと数ありとるハ脇てには留第三韻字留まても手爾を
にくも留ぬもあり百韻哥仙なとし巻にしては
せぬ事なり最近世乃制なれとも此道を好む
人ハよく守るへし

一面八句序於序三乃折破名残乃折急なり初折二
於折但に三の折まくらふれく名残の折まく句早に

まししとかへしこまと百韻乃法なり今時の三目誹初
折よ出ゆけぬ事をいひ名残の折にあもいらしりそ
らぬあそは事をいひ出して制を清ふに長短の距式
ろく両まよ一盲衆盲をとひくとやらしいむ

一御傘なるひ乃説の因に誰か前またいこまと我人倫にせ
たこ徳に古まへハ右にみせたなとしたらし乃事をふ
る乃辞し用ゆる者仰もよそ宗祇宗鑑貞徳立圃な
とのかたきまを営くひとるまし鼠筆なし連
哥にたのてら新式無言抄玉寳抄なと誹諧にくハ御

筆をとゞめ等の法度をよく守るべし　たとひあやまちあ
るとも先師の説のごとく事なき面しを思ひて私の見を
をさしはさむべからず

一三句の中にをのゝ乃事にもかゝるをふ実ふしゝ
しかりやうとゝ云も其途の海になり山ふなるあさとな
りかせるなりすべからく意乃句ふ用くい相物之説
になるゆへ二句ふくすべき光ふよし同しさく後
なるべ八説限るはあしかるべ

一神祇釈教無常哀傷三句まくつゝきとも一句まても
くくくくゝ哀八同句二句續き意あるとい云くく三句へ
係る事説れたるもくくなり意一句ふくさ事ふ八やをめ
意ゝゝ不吉なる歌ゆへ

一入歌一留ゝ同字せぬよし浦山屋水草なとの
類一二を筆ゝさゝるを三句四句ほとふく手ふ蒸留之よ
懐紙つゝとてかゝるなり

一得ふ物ふるゝやうるゝ事をよおなし言葉をい
ふをゝ引ゝ記事也説句ふ八説文八ふ通説ふ八ゝと
れも八筆ふ物をゝゝ世を捨ふをいひ出をゝゝ書ゝ後

根不便の事なりゝやうに成よしつたゝむへし

一点取の事　たいゝく切者の詠もあるそ不切の詠士
たゝるゝことはめは句ゝいやたく心体なくして親ゝなるい
きあしし其子細を人のゝ少も手ゝをきけふ心ひむし
ゝ新句ともしまゝ古人の句成おきなりなる詠ゝく誹賊
きなたをゝく誹書ゝしたゝひ座毎ゝうちゝふしばゝく
人をそうしあさむきゝ侮をゝ和歌の神もん
冥慮たゝ新海ゝしたゝへゝ的を射ゝ中おゝ
百ゝもゝ矢あゝゝるゝりともすゝあゝくゝゝしゝくえ

ふゝゝは射をといゝをもむや猿のゝひ記をゝむゝを
一發句いひをゝく手成こめゝ新句なゝを脚もをの心体ゝ附
ゝ第三ゝ風宗なゝをゝゝもゝゝと見へゝ大ゝ第三
ゝ其巻ゝ出をゝと人ゝ侍ゝ發句脚ゝゝ八君ゝ位第三
ゝゝ拾園大臣乃如ゝ侍ゝ

一十体のゝち滝乃体拉鬼体を学海ゝゝゝこの二ゝ三骨
をゝゝ余情成ゝをゝ新ゝ新の類なゝり

故郷有母秋風涙鎖無人暮雨魂
たもひ生を生ゝ祢ゝをゝ意なゝ神

きせんぶんこうしあるとみやまう殆
この中うりの詩歌を京極黄門定家卿八十俤の内拉
鬼俤へ入れたるなり雅き事なり定極となりそもそも
あもしかるに海内第一とせし事なれども玄俤もん體
共高俤濃體羅俤面白俤所無俤一節俤写古俤
徳力俤この十俤ともに減をそなへしるしたるなり也
一本意を失ふと云事無常哀傷等の事入句中
犯あるむるくに大本意をそむく事なほ
なり人世成をあぬをそうゆうりの老成たるうり

なるべき類なりあるべくかるべきなり
一初んぬ人附句ふは上手付句を附やう小其情
を楽を専一上手付句に奇妙なる句に属しぬるを
なり上手の次に成るもふるもの也是は人と定むるなる
きはあるべきつをく無なり
一難句二人もたもち附句をこほの所をいかがうりあ
べき対へ幽奇文乃ようる前句とやをくかなる所を
沈思なきもむりうる句ものはをやう即附けうの音
をあるべ人昂ぶつるを付もし付へき句に沈思の上の

発句あり新しき句なり新句ふるより所なれば世
のうりあらい先へつもやうとひらうらうしく時を移し況世〻
もめくる発句もなれそのなりとおほせられしよし
一服小説ときりとの習あり發句は時候をおもとする
ものなれなりとは因てきたる乃発句なるべし卯木
うく花蕚なるは梅白ふ花を乃発句乃時候を主とする
ものなれなりこれ世〻初心不切の人好まざるべし
一遠遠とは或事有こあり松乃うち初春なるとふ事を世〻
なきや物ふ事なるとは類婚姻夜をもるの名ふ

秋去ぬうちなる中あうるなるとは恋ふ賀年の
名はなるとは年寄あふ物なるとの類加恋役替ふ
川柳の事帰京深世ものをを伯なるとの類之猿袖留
既恋後者ふきゆる小世きゆるは路ふる伝おもふ
親ふ乃ちしを語はるの松ふ〻恋男ゆまのふ乃宿も定
めなるとの類新宅乃尊ふ寺ふ乃ふ乃跡をやく松
の陰ゆ〻は類夢想はふ世乃中の美ふゆめて
ふるの世世のむまし世の夜世ふ船ふゆめふ
悔しふふるの類遠音乃声ふうふ

くら川せ川ほとゝぎすあゝ中もゝの宿血の池乃事一切ち
らくはらうさゝらの事いくもゝ〳〵一二を落て落す月
次常はの金吾ありとふともちんをまち〳〵いとむこのさくさゝ
ゝ、痛はらうさなとゝはらくいふ事おし一座のちいゝ
はさはあ新毎夏もゝ〳〵たゝき風雅のたしちゝなり
一句口中かなしひ〳〵詩よかちひ〳〵吟心より等り人吟り
はゝ古人もいひ〳〵なり猿丸変乃ゝ
奥山中もみちあゝ〳〵ゝ心ゝ
丁ゝ〳〵はゝ〳〵ゝ雅ゝ〳〵

ゝなりゝゝゝい〳〵るふゝえを暫て祈〳〵めをゝ留り乃たゝく
なるゝも世界ゝゝ留ゝゝり人ゝ吟ひ川なりゝかく
はゝ祈ゝゝゝゝ伊乃ゝ細ゝおゝゝゝゝゝ口ゝゝ人吟
きるは紙来はゝゝをゝ伊の耳ゝゝゝゝ口ふたまはん
ゝ〳〵ゝ誹ふ人はゝ者ゝ人ゝゝ事ゝ〳〵事行住座臥
誹諧とおもひて句はゝ求ゝ〳〵月花ゝゝなり者ゝ
ふもあつゝゝも前句ゝ〳〵発句ゝて者ゝ〳〵ゝ和歌
ゝ師なゝ人はゝ師とゝすゝと英門道家ゝも松尾せゝ
おゝ

一下の巻は秘蔵の手本作葉をもつて志す俳学初心乃好士和歌をもちゐる事あるべからざるなり

一百韻其外折句はいとりの句のみは折かうれ八七句去
句なしとする句なり七句のうちの五句去五句乃至五句
去三句の句のハ二句去折載せゆるす八つ句も折かうれ
とも合かうきなり歌は和漢濃和乃ち七句五句去
ハ三句三句ハ二句折越ハ式目のごとくと新式よりも志
にくきものなるゆへなり

芭蕉庵桃青著

手本作葉の事

一切字乃事

う形 もこのれ やしはしぬるゝ字ハ きそ
ゆ すをせをへ せをいふ

右十八字

一う形 指定 ふかふ ふうれ 祈うしのう形もうれ也

右三ツ乃うるのかふふうくうるこのもうれ也

古来ハ五ツ也

三ツハ詠の時は思惟を結て合點ゆく事なり

フルムリスシツハ留まらぬ所とは留り行ちつゝを結へ

上手のうへハ格別の事へ花もゞ形是ゞ形ハ印ゞ形なり

一や古来七ツ乃やとふ　切や切のやともハ　中乃やハ

鈴のや　そ乃やの心　すそ乃やハ四ツノ　捨や

口合乃やハ三ツノ

中のやすそ乃やそのやハ口合乃やふそ乃やハ留ル留ル留ル

ゝ乃ゝ乃ゝ乃名所のや部類やなと乃類切字ふもふ

一　古来三世乃ゝとふ　切字ふそ遣ゝ乃ゝ遣ゝ乃ゝなるぬなり

むふし　とふ　そ乃里部りきくらいり西ふ乃切字

なり遣ゝ乃ゝハ部ふかすふなり味ふ〳〵　未来のゝハ

不ハ字ふかふ是切字なりゝ文字濁ゝ点ゝ乃ゝ未

来なり月ハ是ゝいたゝゝきゝゝ乃ゝ数なり

一ハ畢ハ切ゝ不ハ切ゝ点ゝ

月ハ畢ぬ袖ハ畢ぬ多ハ畢ぬかく乃ゝ乃ゝ止ふ乃の句調ふ

ゝふ　一

一らん字　一字なるハらんにかよふ二字なるハ離れ上をうけてよく
きらん（着）　みらん（見）　せん（為）　称らん　寄らん（寐）　降らん
思らんなどいふ類皆一字なり　降るらん　染むらん
咲くらん　為す（ナス）らん　経るらん　別るらん（ウリスツヌフムユルニカヨフ）　此類二字なれバなり
但らん　なるらん　見らん　此も三字なれバ皆切字に
なるなり　帰らん　止むも乃類二字なれば二字なるに見ていふにもあるまじけれ
又音なるを　帰る　止む乃見乃字をラニヨブなれバ一字に
らの字（ラリルレロ乃通音）　帰る（ラルリ）　止る（ラルリ）　此通なり
一この類なり　やとりふらしいらじらすとし結て給へ

并にこれ乃このまへにいふ所をあわせ類に（なるなり）
分けて通ふ治定ならぬを味ハ所也　一ツ濁ると濁らぬハ切
字になるとならぬとしかいひしかといふ切字になるなり
一かな　落着乃てにはこ発句乃中に出る時は子細なし
下に出る時ハ中七文字の末中に文字是にかなといふな
らすへし　文字にしたがへ結を平句と同しにする故なり
かな（二字）　き（一字）　けり（三字）　皆同前　結しの反　かなり乃反　き
一哉　片付ほこしつけたる詞なりとまでそれぞれ一
向見たれぬ字に結て給ふなり

一けり　花さける川　等はさける川の類なりとわなくいふ
後は切字にあらねとさける川伊はとかへ移る
は現在の詞なりつるといふを得ぬかたあり花咲けると
いふをさして咲ぬといへるをさすらは絶なりさくつるを
るを絶言は絶後せぬなりいつ迄も不絶るをいはさる不ゝ
たぬゝ切字になるへ

一ず　古来もまれなる切字也大かたは五七五の句中に用
字なり発句にては切字の下ふらく絶なる字を用て
其上まれ切也　月　雪　花　郭公　梅　桜　等の景物

かくをなくよししいふ迄も留の切字也

連歌　一丁点は点ひもあへず降るき次

誹諧　御簾の思ひもよらぬ香碟

右の類なり

一し　の絶る下知之文字ならばかゝる迄よき所付字もあり
一せ　さすがに下知にはしめて似たりつめつくせ
なといへるも下知のおもて深切してをしまれのさ絶なり
まれの及しせなりそ見てそ絶せなり
一まし　まれ下知にも自他の(ジタノ)ら絶にも詠む迄　自　雪もこ

そ山迄自　忘れめ梅迄　下知　恋て帰迄　下知
かくのごとく下知も自もありあちハへ分るべし
一へ　下知も自もある故也　流れてもていふも有の残る
彼為よつ掛るへなしと見て下知もあれに　くへいへ（食日）
たとへ　なしとの随き下知なり
一をと　ここ迄まふけあらし自　落る也なり　下知
あらしこそふけ自　為に下掛なり自
一いふ　問せ処を敷けの彼まさ歎の詞にもなる故なり
右十八切字なり初心人あやしむ詞切字用ゆをなさ

れ上工於ミ心は心の句ヨリなり句の外に流れるこころ残なり
る故座に切字なくても徳残なけ迄は平句形り判
発句たるへかなハ切り随うにまへしかようにはとくひまた
発句にそき脇出を残しても同じ様迄秋の野の末の野
月かやふに類なり京物似かなひて是発句にしく見え
松むし是松むしとのみへはさつては梅とのみへはむめハむめと
きこゆ故随り十月随ふに所残平[illegible]にいひ
出故同十を集につきちれは一作になる随し一作
迄寄故はあつてハしく察あらし感性あるく言外に

意味あるにあらず俗言なり

一うゑ　うゑ　もうゑ　うゑ　五音

一めり　さうめり　せうめり　さうめり　うめり

出る

一うめる　あうめる　さうめる　しめる　うめる　める

なるべし　うんうめる出る

一もゐし　ゐゐし　もゐ　ゐもゐ　ゐ　同なり

向しうめる出る

一やゐゐ　やゐゐ男なり　れもゐへまゐゐ不思

いろふへまやゐ不厭やとはうゐいひうとうめもうへまをに

を拾なり中のやうに出る

一ふを　ゐけ習字ふへめれ乃五音ふ字ふくとめ能を

とまり仁　結ぶをきけ和をとれ音をとるせ

意ふを意せ和ふを白ゐ免なるい魚歌を

をなり出る

一なり　ゐめうりなりふをいへを切字ゐ能を

一いつ　いつこいつくいつちいつくいつゐいつくいくう

いうくいふせんいんいうゑいうせんいふせんをゐふ

いそがいう、せん紙上ゴ音信
ふしをせ　せういさいざ　さて　おもしやうなとこゝ
つゝんるり
一涼し　嫌し　悪しいそるゆう
もしなるる類　涼しすこし　況をいへ　絶せ
ぎゆへ切　ぬべき文字いをて切字なり
一思ふ　忘る　待るも切字なり　たもふる　待るい　不切
ふも絶なりをて　ふしてふしぬもあり　之ふ
ふい　昏る　悔る　悔る　悔る此類なり

るいといふれぬ切字あり
一あれとうる　あるたうと　うこて　あやめ　いすして
ふもやノしノをいへを切字
一大通しとりふを下ふり上中まり　あるく　字なく
回船ふ　句なり
一をまりとふを二ゐあり一を何してをふ心
一をいせんもなれといい　ぬるろかふもあり
名をさしはきうさ　句をる規
一玄妙切　ふれハ之不る切字入るるり其留とふ

ちの字切字をうの字に用ひ**お乃**二字を不をなり

一辰切　たもし　弱き物をふせ五十六なり（くいつき）

も風俗あるふりしたるなり

一云字切　うもも玄妙切同なるうの字に事八世上

ふるあるをひへ書生なるなり

一二字切　二字とふる名あるを語経の所を一字なり

でを切字をなるなり上を切字をよるなるなり

をを切なりたとへをむふ一上をみるををとる

を事をなるしかに切をもむふ一用にをなるなり

風流一伊をもてを扇の部

世ぶをうれの後なり共同答なり大形七年正月

梅の香を清敢なるや白梅人

遊逸後殿御内なるをの字ぬへ初仁の人好き記体なり

一ぶ留不相應　あもしふ　うすらぶ　をらぶ

たまふぶ　たつらぶ　咲何なる花なり　咲るぶ

入ゆるを　ひしらぶ　うをはうきうふををあし、

一類の字置所とふ事

田れあせや雀を猫を捨ふらむ

あり、

田ぢあぜの雀蓋や拾ふらむ

田も雀もいはゝ仰ぎ拾ふを蓋雀とゝろふ

とよ

一ゝんとゝるゝはやとゝろふ事古来より定不定法

なり仰ぎもゝろふはゝるゝかゝた

紫ぢ戸よりゝ川ぢ鼠なり 来迎ぢ鼠も

一ゝ字なくてゝ行るゝを上ゝ事をもと仰をせめくいひ

ゝゝ鼠ゝ字ゝ不及人

豊乃秋ちまゝ、ぢ竈ゝろうん

ゝゝとなり世なり治定なり、見ゝ帰ゝ人ゝ花も恨ぢも

恨ゝゝなり治定ぢゝなり

一ゝ留 改正 遣ゝ ゝ花もゝ不 ゝ花もゝ不 遣

玄院ゝ千あり

上千ゝ鼠ぢ詞あり ゝゝはゝ留ゝ面ゝす

一ゝ留 ゝ字ゝ八ゝ字ゝ ゝゝ押字ゝ留ゝ

世字ゝ ゝゝ留ゝ千ゝ ゝ鼠ぢなり

大ゝ発句あれ海千 第三ゝ面ゝ面ゝ事ゝゝゝ

ゆへなりなり句法の自然にまかせ制の限ル
て無しあるべし
生得なるべきはそらふる那もすうれたる所面れなる
類ふくといふを生得なるふるはるれ引ふくるらふて
かたらふくさやうふくなるべき類の歌といふ如ふる所
るべき格別なり
一にくるまの留ル時ハ一句下知いまを下知ある時ハと文字
よりと
文字入ふ事押ふくるを細ふ
一押へ字一句ニ二ハあるくとふるるぬ人のりるる発

句ル切字同ぶるそに事ル留ル一字ル押字と
ふなり
一上下ル時とふ字あル時ハ通用ル留ルなる
ふを世界ル也留ル事キシルリツフム計ル三ル文
字ふく留ルなり
一上下ル句遣ル文字ふく留ル事法ふなり
遣ル也ふそハ下に詞なくて八世界事ルりを来の句
を入ル所ル遣ル乃ふにくる留ル所あり一向ル事なり
ルとへハ

又ぞうらの花ふ落ぬ日ぞ暮し　遊志

遠山さくら色ぞ見たをひし　遊志

うぐひすなりむしふし笛ぞなり

松ぞ〳〵雪白し人ぞなりし　言紫

蛙〳〵、

一文字笛里大さ短匁なり文字ぞ上ぞ色字　ウクリス

ツヌフムユルシ　ぞ色ぞ楽字なり　フルムリス

シツ古来ぞ笛めなり　ぞ楽ぞは世界を形りたと〳〵を

人来ぞ笛　ぞ色ぞ色ぞ笛　人来ぞ笛ぞ

ぞ色ぞ形文笛ぞはいひぞし色の色と文笛ぞ

ふぞ〳〵と乃字の入ぞふぞなり文笛ぞ世ぞ乃字ぞい

ぞ男ぞふ風流あぞ笛〳〵形里涅槃佛文笛ぞは文

笛ぞと文字入ぞ孤と笛ぞく形里世界浪ぞう〳〵ぞ文笛

悔ぞぞれ文笛月ぞぞ永文笛ぞ色は仰事もぞく色

ぞ乃字とあぞ考ぞぞなり

想俸文笛ぞ上ぞ風流ぞ面ぞ事ぞいひて留ぞ面

一下乃句ぞれ笛ぞ事　ぞ細ぞ〳〵ぞ色〳〵ぞ笛

ぞ〳〵ぞ色笛〳〵月鼻ぞ〳〵ぞ利口ぞ〳〵ぞ

とう〳〵を此もいふまじ始う記さるゝ所
とうへをなり
一をふう〳〵をまふと五文字大事なり五文字へうりく
かゝ所をのうよをなりをの字中の七文字のをゝ
無事なり

二へうるゝ日ある宿ゝ歌

一下句て留里古来なりゝ云ふ〳〵ハせ歌事なりゝ
秘事せり下の七文字ふ風流をふなり上ゝ七文字
まはいふ〳〵此事いふ〳〵ゝ下ゝ七文字ゝ

ゝ花ハ春り来ゝ松ハたゝ〳〵ゝ花をふゝひゝくゝかゝくゝゝ
ふなりハの字みゝくたゝへるなり
一下乃句つゝをゝりつゝふゝか歌ゝなゝ記事ゝふゝをはなり
つゝ陸たゝりゝ事ゝハせんゝ我衣手ハゝ後ゝ濡ゝ我
衣手ゝ宵ゝ春りつゝやゝゝ田ゝ多もこゝゝ
もゝおもひつゝゝ数かゝり乃記ゝ詠ゝ姫ゝの
ゝ者ハ春りつゝのゝいゝや上のふゝゝ後ゝゝ
ゝ細ゝ以上乃句ゝはまりゝゝふゝ中〳〵大ゝゝ事ゝ歌事
此り連歌ふも此ゝも後ゝゝ二句乃四物二ゝ者ハ

くハ不可笛事也

一物を笛るとも前句趣意を不笛ゝ

一沼定乃ふくさ乃ゆゑ笛ゝ

梦のゝ月をしらひむしふく

一をてゝはゝとゝ〳〵ゝ〳〵ゝあまり意化例

通あれはをを一雁の名乃をゝ　をを

をはしをゝ人も新を花翁て　新を花

一八字乃付所さ〳〵何の牧ふゝ　を　淮を

世字を是此付不有ゝ前句此あゝ意花ゝ

一下乃句を前句へをを不業なゝ伊〳〵上七文字下七文字形

迄しをを同ゝゝ紙ゝ少伊ゝ西ゝ人ゝゝ伊〳〵勝も

ゝ文字入句作なり雪ゝをの〳〵ゝあゝ迄樺ゝなゝ

作ゝ迄も八の字をさ〳〵字也あゝ迄八樺ふとふん也

一をまゝ　をゝぬとゝふ事一句を綜不なくいひつめなゝ

曲なゝ紀ゝ大ゝふいひをせゝ其不ゝ人ふゝゝ

ゝ迄ゝをを迄ゝなゝと付ゝもひゝしとつゆゝゝ八曲な紀な

ゝ十をゝ八七ゝをゝををあゝゝゝ三ゝ四ゝを言ゝふあ

ゝふゝゝ　ゝゝゝふきゝ勢ゝゝ古人もいひしなり

一すべて句毎に有風に変なり外に示し
必あり事なりこれもたまゝぬまに業へいひ侍めし言
葉もちゐるまに業なりすべも後くいやしゝ
とあるゝさらん関乃あるゝ袖さへてとゝ
意なるゝ発すべきやうやうもいとゝ後の里
一あげ句仕様乃事発句字入ぬゝ中なひゝ
発句ばかり成合ゝ後言なるゝ祝言ばかり後大ゝ
其仏成かりゝ前之中ばかり新京物を
考へゝ新の句をしてやゝうふすへし

一をハ成るをゝくの不せよとなりばかり字ハいゝ入ても句中
さゝぬなりをハはさらゝ発ゝ学ぶ事もあり句ハ
きれをうけ乃さやけ成なるの類之
一句の留ハ句へゝ成てはゝくゝよくかなひ言葉ハ
くゝ中ゝ
一ハはりにと留るも其句ばかり合ばかり中も
りの留へし
一第三て留らん留自然より留もるし　留発句乃留
昭中獨乃ての時小留句と之ゝ也は宗祇乃時侍

いろやうの面ふくも古をこゝ出ても第三めゐ
ゆゑ家ふくてなるの面なりの眼と字面へてまた
にあ為く事も有まし顔字面ゝく洲字漢和乃所ん
顔殿なり常も顔乃風流ゆゑ文字ふく為る事たしゆゑ
一辭顔とゝふ常乃俳諧ゆゑ下七句ゑ為面ゑ
眼句より顔ゑ為むゆゑ寛も発句ゆゑ字中ゑ顔
字ゑゝ始なり
一句中で字ゑ先ゑ用捨ゑ為ゆゑ上ゑ乃仕立ゑ
句ゆゑ伊ぶ伊ぶとゝふ事稀なり

一四時の季を用ゆるゆもあるへきゝ四の季ゑ用ゆゑ
よゝ少なゝもぬ季ゆまゝゆゑ夏朝ゑ夏ゑ用ひ来ゆ
用ゆゑゝ不功乃化者なゝ古人の用来ゝゝ季
を用ひ句もあまり付んもあゝゝ久ゝも明倉歟ゑゝ
耳を警ゑ為ゑ来手紙月辰乃故事ゑ入ゝせぬあゝ
一高野寛ゝゝいりかゝ乃作句あゝゝのひゝと五尺
乃菖蒲ゑ池中ゑりゆ出ゝゝゝ口ふたまゝ次五の
まゝに作句あゆ為ゝゝ手紙の木もむ紀ゑやゝには
あゝ入れもふゑ句ふなりぬゝゝ句作りのゝ

中言葉整中いひ続しら而言外の余情を含
一前句を少らけうに流るゝ詞くゝ句ゝ言葉の縁中
もうりうゝ場合歌句とも有面しらし前句の
面の残心面白し
一ゆてふを きせうゝにを 捨てよ紫 をてふは
あつゝ〳〵をこと こゝあをにを さゝ〳〵をたを そうし
を中は 拓ちひてをを。 言語しを中紫
思ふてうは あうりてをを そうをを中 紫
んつゆををを んつゝ〳〵てをは あうりををは

に為てをを らてをは
右ゆを中紫を欲なをに大切なり俳ふも古流
ふを用ひ當流ふは志ゝこゝ乃ま仮古風を口之を
言葉中をうり仕をも有ゝを中ゝ刑 右てふを
あり当流ふは歌句ゆ意を見在ひ後くつけ中
ゆ〳〵ふを紫中すうゝ仮うを拙句四を付ふを
なる也

弔の為世をうらむ芭蕉葉の枝一葉
あり諸ゟ俳諧百人一句を撰し
婦示信を誠用し一堂を葉葉を
奥富能に俳諧書板を広く世を
嘆し人を利を今年の夏重病を
良薬を乞し出世の仰未来を成当
をとゝ曰出世を示ゟ物り様ゟ餞を
世尓をてをもしてをふとを当五来を
弔をゝ利俳諧板を通を所弔の

俳書を秘蔵を佐藤の梅竹を
ら年ゟ出ゝ手ゟ人ゝ世ゟ成出ゝ
好人を使を毎を通豊家士漂乃を元を
能を法世を人ゝを形能を
遠年無婚の年尓如文書俱も
多竹百酒尓能ゝを識を眼能
を出を人ゝの能正ゝ加ゝ中能
を出ゝ年能神不を除手を彩

享保十六亥秋八月望

江都書林
須原屋市兵衛梓行

于旨天明三年冬極月初菊人風坡
机邉謹寫書之

二十五ケ條傳

目録

一かたをるこの事
一おの玉ぬけ木の事
一玉うしこの事
一手向草ぬけ事
一こゝ川をぬけ鏡の事
一ぬましきあの事
一わらうこの事
一酒をかの薄の事
一ちゝのぬけ事
一こぬ草ぬけ事
一こゝ海の事
一家ぬけ風の芝
一さびとゝの事
一あをゝこゝの事

一うきゝ草の事
一うき木の事
一うきもこの事
一かさゝぎの橋の変
一ちどりの事
一あさぢふのさゝひの変
一うゝ毛の事
一うゝ波なら浦の変
一玉ゝゝよの事
一優曇華（ウトンケ）の変
一里乃満士（ノマツ）并芦田鶴
芦鶴の事

目録終

一うゝをるこ

女郎男郎のあるゝふあるゝ次第なるゝと云事なり

紀州和歌の浦ハ四国の淡海より狭き海なれとも干潟ハ

次第みちて干潟ふ一

浪ふあゝ次第なり

毛ゝなるこ　音をるこ　花もるこ　風もるこ

汐をるこ　をゝゝなるこ　いゝん変をるこ　をゝ和寄

のゝゝこ　ゝせなり

芦鶴ハ此浦ゝゝ遠ゝ見うゝしゝ人江迄満なれ法華

和歌の浦に汐みちくれば芦辺なる田鶴の声聞ゆ

和歌の浦よりは海を隔て紀伊へ渡る海路にて芦辺なる田鶴の声聞ゆとよめる

この歌は万葉集に載せたり

一をう玉の木　二月なり

御帰位の時御守護被遊木を大嘗玉木と云

又正月松竹の根より出る木を嵬木（ヲカメノキ）と云

一玉うち

玉柏と書石の事をよめり

難波江のもにうばらをうえてうぐいすを

一手向草（タムケクサ）　松の事なり

中納言家持手向草の詞を使へり手向草と云ふも

手向草の事なり

花の梨子を稚ふ稚と云事に

盗枯河ともいふ伊勢物語

よ松ゝ松ゝと川辺の皇子

白浪の浜松の枝の手向草いくよまでふる身を絶ぬ人

津の人ゝ

あ人事をとふ松の枝は手向草いくよ志賀を袖ともえん

家持

八重草の花はうりふたもとなり松ふさえを袖に結ん

一うりの花　うりの花は山ゐなり
一の条の記屋なり

山ゐのあるをきけば愁を深くなり昔玄宗皇帝へ
隣国より山ゐを奉る帝夢をうんとおもせとらだ
その形ゆゑ后宮のうちこうち記女御おりてかの友を
はなれてあるけへいらぬなりんと笑よ後をうけさせ
ぬまをそふ陽ゆきかをとふへ後家をうく哭留り
友なりてそるふさつる山ゐの新うつるも高よ月ゆく

一ぬまどぶぬ

さうらふ殿ひ人の科をそふて流罪かとにうき名
ちりをを

ぬまど衣を人ふいをん記の祝ものゆ後もう記
なりとも

但遊ゆ結ひうり白又ゆ

一わらはい　急遽と云病弟なり出の
ちうう病弟なり

毎ささうふも人の係め向ひて後しき祝なり

いくばくはうふ人あり　もとの庫よもしゆうふて
うふとこうよ

一ちちふし草　萱草　庭ケしよ仰ち草なり

ゆ草我枕ふちふし人を云ふとと又大和物語ゆハ

新まゆふる忠小弟とい〳〵を

秋萩の新乃ふるまゆふることくるせる〳〵やうてもこゝろ高しまべ

又住吉の仏を云口傳

一ちゝ木こ　幕木こと云

いつちもあるへきもと住吉をあるゝ姫せやと云ふ

あるとかもも詠める歌中ちう幕を立てるとく

入母屋くまりてえんを設りうち枝の中ちうし

あるう木なり

その京や姫せやにまふはゝ木このあるとはえんく

あるゝ君ちう

一ちゝもこ

吾妹兒（ハキモコ）と言ふ我ら妻へ

ちゝもこう祝〳〵ふ象を猪伏の池の玉もとえんまそ　此一記

一かゝよのは

高砂をるゝへ松中ゆけうちうたんはゝし

かゝ記の乃ちう松中立ちをの高砂記をうしを松を

文よりうり

此松りうちゆけ侍るうの高砂記をいつちみを詠ち

や又七夕よさあ歌祝ゆへきやんはゝし詠ちよふ

きて七夕ゆ家中引ちうん

村やゝ[illegible]よ衣やうもの紀らさくきの行合のまよりゃねや行くらん

カサ。ギノハシハ
カタ。ソキノ端也

五音相通　アカサタナ
サシスセソ

一ちりを云ち　八雲ゝ塵沼と有
そこ〳〵ゝ[illegible]ゝ初めを云高き山も始もとゝ
りを云ちりおうゝ[illegible]古今
[illegible]はちりく山のちりなり

一ありけるさび
世中あり付人真ま[illegible]伝をおもふ[illegible]

くゝ成を云なり
ありけはあるけすゝひよみくりしなくてを[illegible]
りもちり

一面をかの薄
面をかい　十寸稲と書　稲ゝ[illegible]尺よりゝを云
面をかい　苧麻稲と書　稲白く麻のゝく成を云
面すゝい　苧藁枕と書　稲面つゝいよすゝのゝく成を云
哉前色の涙かて　西行法師

志面のまる面をゝの小貝拾ふとてゝの
涙をはふるゝあるゝ苔

小萩蒔の海もくの小貝小盃　　宗牧

此度の貝桜貝なるとのすくれたることまらるまとはしく
ゆくりなくなりぬる城陰まて打ぬけ砂利のうく浦中

一志なうる　尾長なと事　猶々事也

後鳥羽のいなく雄略天皇桜保ゆいるの肥よ猶物
しのひし時猶なりぬれを家ヶ

志なうるいるの姫しゑ原ゆ海志さの姫ゆ事のおもし
後よのうる

志なうるみなる理を行ハ有ま山久鳥高取宿ハなくして
一うる紀草　三牧と書

方梁　家の事也　猶皮蒼なるの此殿

もの殿ハむへもるみうりう紀草のうりをうりをよ
うをりをうりをハ三棟棟と書　　そのをうりして

一志つ海　無言と書

志つ海よ後つくといいて仏ほてもおなしうるふうり
物いうぬるをしして毎ハむうる也

未摘花のいうへ志ゆ物事成　源氏

いくしうしゆ君ゆ志つ海ヶ海ヶ生ゆけぬうんをあう
いくそをいうぬ物をうヶ

一家の風

家々の作法也 文道武道家々の作法也

久しき月のかつらも折こそ家の風をも始めて

是は藤原氏の家也 偽りなる所かくるめり

うつゝの枝とは及ぶまじきうつゝの枝を折て為つさへ

月出て秀月の光をしへ

一さび

奥ゆかしきふるさびは清也 剣刀なるふるさびは錆也

神さびうしさびは久しくなりぬる神 久しく和りぬる神

一あを

蓑笠さびは宿なり 老くく白髪の神へ

笠とは云ナレは若の神へ

おきるさび人るさめそ物哀をふりうて田路也

蓑の事なり

和泉式部いなり山へ詣て帰時小雨降時

されは草刈る童のあをそふるものとうく折つゝ

毎歌ものきうり団

赤ゝ出る稲荷の山社の葉はあをうしよりおもしろきて記

一かゝあをし 参差と書

なを神の為つ世とゝ小天一神へ此神のおゝ世方

ふさうり人其日そふさ行とて叶はぬ事あれば俗うよ
の家ようたりの一重やうりて其方角をうけて行事
ことかくへあうへとうたなり
光原氏のうへあうへ二條の内裏ようり中川へおり
ほりてゆうりのふ 此中川は今の京極川也
一さわうの事 梭 榔間と書
布を織に梭とりふねを左右へなげうる事なり
ふさうふねを是を世俗たちなれたと詩歌も多
何もおもひ梭とうり身をあさきをうる所の義のうき世なり

一むらさき 玉筆と書 ほうしの間なり
ねの中よりいことりふ民氏紀の初春初子のうの小松を
引筆よりひし紀を掃く夜後なり
又春のふりあるうり春の初子のうの小松をう
あつさへうりは筆のうなりとふへ
よのかはふ冊子を藏をあやうんと玉はねを巻く間へ
初春社初子のうふの玉をとれまうりのうりはつく
ぶうくうはのぶうへ 玉はねとは余へ 玉はねは

一うどんけ 優鉢羅花と書 又昊瑞花也

信濃の花の咲ける所に又ある所の花と云事なし
こゝ事まこと一度咲七種を見てまことなる花人也
源氏にハ病ありて小山にこもりかくれおはしまし
ある時或老僧きたりの君を初めて入まゐらせ
光りの御紀こゝにかゝれたるはひとへ御
けのたまはせてゐる仏地にて高き嶺に月こそ
ゆ所人也於等修行屋にして鳥羽院の御宇永

一星於満士

阿波国の名所之人の歌まあり度
世所人也於等修行屋にして鳥羽院の御宇永

久元年六月侯於雅名上首として新撰和歌を作り新
世星新撰歌之
其後中絶せしを光明院の御宇まさしく又作り新日理
資宣に上首にて

一座 一首 題 初秋風 筆宜

星於満士の京極の御方の一首
もゝしきもなびく秋の初風

一芦田鶴

非植物
非水辺
雞也

水辺也
非植物
又鳥也

一芦鴨

・鶴 クロツル
アシタヅ

・鶏 カモ
メカモ
アヒカモ

只鶴只鴨也

二十五七條終

二十五七條の傳ハ拾一卷の内へ合し
くさ〻とゝふす海士の四へなるしも 海士
色義の書よ 猶 けふ海士なるは 光
久しゝ 袖 珍なるんと一首 拾の内
枝ち ハ色のさくらゝ 紅 持かせ しよう 歌
ふ海士よ 色 なしとふる 二十 の 書 まも
ゝ 武 の 白 も 猶 ひ 置 ゝ はあふ ゝ ち
義 ふ 好 書 ふ し も あ し 次 や と 未 し
ハ ゝ 行 色 し ふ も ふ ら 海 士 ゝ を 恋 て

秘事へ紀書もあるへ[illegible]も[illegible]不秘
ふるしなくとも思ふ人に相もあるへ
とて里[illegible]もあるべし

[illegible]明[illegible]所[illegible]職[illegible]の
葛人の見坂机[illegible]いとあり中
[illegible]